

エッセイ

やじ馬昆虫撮影記

(その5 17年ゼミに会う)

千葉大学大学院 准教授

野村 昌史 (のむら まさし)

現在米国のペンシルベニア州立大学で研修中の私であるが、せっかく広い米国に来たのだから研修(実験)だけではなく、現地の昆虫も見たいと思っている。

仕事上「害虫や天敵」は観察したいところだが、米国の昆虫といえば、「17年ゼミ」は是非とも見たい昆虫だ。そこで渡米前に資料を見ると、今年はペンシルベニア州西部でも発生するではないか！偶然とはいえ奇跡的である。発生は5月の末ごろからだというので、専門のウェブサイトを確認するとともに、周りの人にも聞いて情報を仕入れてみた。

しかし人からの情報があてにならない。「大学構内に出るよ」と言い切る教授は4年前に来た人だし、13年前からいる教授は「13年前はNYにセミがいたけど、ここにはいなかったから発生しない」と17年と伝えても通じない。これでは学内で発生するのかわからず、近くで発生していたのに結局見なかった、という悲しい結末が待っているかもしれない。

そんなことはあってはならないので、サイト情報をもとに大学から近い発生地に行くことにしたが、確実に見るなら目撃情報が多いところに行けば絶対だ！と出発直前に計画変更。車で片道4時間かかるが、オハイオ州のクリーブランド近郊の国立公園に向かって出発した。

サイト情報だけなので、目指す17年ゼミが本当にいるのか不安だったが、ハイウェイを降り国立公園に入るとすぐ、周りじゅうでセミが鳴いているのが聞こえた！少し走って駐車場を見つけ、車を止めると目の前の草むらには数多くの羽化した17年ゼミがいるではないか、

感激であった(図-1)。その後は付近を散策して写真を撮り、午後には低い木に集まって合唱している集団も見ることができた。夢に描いた光景の中、やはり来てよかったと心から思った。

その後、サイトでは発生地の拡大がないので、2週間後に今度は車で2時間程度のピッツバーグ近郊の発生地に羽化個体の撮影に出かけた。町中に響くセミの声に再び感動するとともに、木にびっしりとつく集団も撮影し(図-2)、いよいよ残るは羽化個体の撮影である。

しかし夜になっても、羽化のために地表に出てくる幼虫の姿はなかった。もちろん付近は抜け殻だらけである。「そんなはずはない」と夜中に何度か起きて確認したが、とうとう朝まで1匹も見ることにはなかった。そして、そのときになって私にはすべてがわかったのだ…

17年に1回出てくるセミの羽化の時期は短期間なのだろう、そして一斉に羽化したセミは、今もまだ合唱しているものの、子孫を残す可能性が低くなる遅れて羽化する個体は、ほとんどいないのだ。それを裏付けるように、どこの木の下にもセミの死骸が積みもり、発生を終わりを告げていた。見事な自然選択の結果である彼らの生活史に驚嘆するしかなかった…

そして、ついにキャンパス内で発生することはなく、17年ゼミのシーズンは終わった。今回の教訓は「情報は集めても、基本は自分で動くこと」であった。離れた場所まで見に行っても出会えて本当によかったと思う、そして今度は羽化個体を撮影しに、来年の発生地に行きたいと本気で思う私である。



図-1 体が固まるのを待つ17年ゼミ



図-2 17年ゼミの集団